

Title	ナズィール・アフマド研究(Ⅰ)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学学報. 75(1-2) p.89-p.105
Issue Date	1988-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81176">https://hdl.handle.net/11094/81176</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ナズィール・アフマド研究 (I)

松 村 耕 光

## A Study of Nadhīr Aḥmad (I)

by Takamitsu Matsumura

Nadhīr Aḥmad (1830—1912) is undoubtedly one the most important novelists in Urdu literature. His first novel *Mir'at al-'Urūs* (The Mirror of the Bride), which was written in 1869, is said to be the first novel in Urdu. He wrote seven novels including *Mir'at al-'Urūs*, all of which are highly didactic and, in many cases, religious and philosophical.

In studying Nadhīr Aḥmad, attention should be given to the following points;

1) Nadhīr Aḥmad was deeply influenced by the *Zeitgeist* which called for change in every sphere of life. He wrote novels in order to change the spirit of Indian Muslims, not to produce literary achievements. It would be fruitful to read Nadhīr Aḥmad's novels as the historical documents of the transition period rather than to read them only as literary works.

2) The historical significance of Nadhīr Aḥmad's work would not be realized until the influence of English literature and philosophy of enlightenment is not taken into consideration. Some of the British officers launched campaigns for enlightenment in India and their efforts influenced the Muslim elite to such an extent that it is almost impossible to understand the historical significance of the service of the Muslim reformers without referring to these enlightenment campaigns. Nadhīr Aḥmad also accepted the influence. He was one of the distinguished leaders of Indian enlightenment movements.

3) Nadhīr Aḥmad's novels have religious and philosophical importance as well as literary merits. Nadhīr Aḥmad was a notable figure not only as a novelist but also as a religious and philosophical thinker. The latter aspect, on which little attention has been paid, should not be ignored. His religious and philosophical writings should be minutely examined.

This study of Nadhīr Aḥmad would appear serially and this is the first part of

it. The contents are as follows:

Chapter 1 The Life and Work of Nadhīr Aḥmad

- (1) Early life
- (2) Nadhīr Aḥmad and the Delhi College
- (3) Nadhīr Aḥmad and the “Indian Mutiny”
- (4) Nadhīr Aḥmad’s early writings
- (5) To Hyderabad and back to Delhi

は じ め に

ウルドゥー最初の長編小説を書いた作家として有名なナズィール・アフマド (Nadhīr Aḥmad 1830–1912)については、筆者の目に触れたものだけで、次のような研究書が刊行されている。

インド

- 1) Ashfāq Aḥmad A’zmi, *Nadhīr Aḥmad : shakhsīyat aur kārnāmē*, Delhi, 1974. 博士論文 (ゴークラブル大学)

- 2) Ashfāq Muḥammad Khān, *Nadhīr Aḥmad ke novel*, New Delhi, 1978. 博士論文 (アリーガル大学)

パキスタン

- 3) Bashir Maḥmūd Akhtar, *Nadhīr Aḥmad ki novel nigārī ka fann*, Lyallpur, [1966].
- 4) Anīs Nāgī, *Nadhīr Aḥmad ki novel nigārī*, Lahore, 1966.
- 5) Iftikhār Aḥmad Siddiqī, *Maulavī Nadhīr Aḥmad Dehlvi : āḥwāl-o-āthār*, Lahore, 1971. 博士論文 (パンジャブ大学)

以上の中で質量共に優れているのは、5)の研究書で、500ページ近い大著である。この研究書の中でイフティカル・アフマド・スィッディキーは、それまで無批判に受け容れられてきたイフティカル・アラムの『ナズィール伝』(Iftikhār ‘Ālam, *Ḥayāt al-Nadhīr*, Delhi, n.d.)などを批判的に読み、正確なナズィール・アフマド像を描き出そうとすると同時に、ナズィール・アフマドの小説以外の著作にも検討を加え、包括的にナズィール・アフマドを捉えようと試みている。この点で高く評価する事が出来るが、ナズィール・アフマドとその同時代の文学者・思想家との比較が十分に行なわれていない点、ナズィール・アフマドの思想家としての側面があまり明確にされていない点、インドに於ける近代文学・近代思想の形成の問題に対する問題意識が希薄である点などで不満が残る。本稿に於いては、以上のような不満を踏まえた上で、インド・ムスリム社会の転換期を生き、インド・ムスリムに大きな影響を与えたナズィール・アフマドの文学と思想を総合的に把握し、その拠って立つ歴史的基盤を明確にしてみたいと思う。そして文学者・思想家ナズィール・アフマドの歴史的位置を確定すると同時に、イギリス啓蒙思想の影響を強烈に受けながらも、

それとは異なる形態を採ったインド啓蒙思想の特性についても併せて考察してみる事にしたい。

## 第1章 生涯と著作

### (1)

ナズィール・アフマドは、1830年、ビジュノールのレーハル (Rēhar) という小さな村で生まれた。ナズィール・アフマドの家は、代々、神秘家、法学者、ウラマーを輩出した家柄で、父マウラヴィー・サアードット・アリー (Maulavī Sa‘ādat ‘Alī) も、きわめて宗教的な人物であったと言われる<sup>(1)</sup>。

1834年頃、サアードット・アリーは、ビジュノールへ移り、ここで小さな農地の経営に当たったが、暮らしは裕福とはいかず、少年達を教えて糧を得なければならなかった。ナズィール・アフマドは、この父から、コーランとペルシャ語の教育を受けた。

1839年頃、ビジュノールに、副徴税官(Deputy Collector)で、学者、詩人でもある、マウラヴィー・ナスルッラー・カーン(Maulavī Nasrullāh Khān)という人物が転勤して来た。この人物は、ナズィール・アフマドの祖父の門弟で、ナズィール・アフマドの家と交際があった。ナスルッラー・カーンは学識の深い人物であったので、ナズィール・アフマドは、兄と共に、ナスルッラー・カーンの許でアラビヤ語、論理学、哲学を学ぶ事になる。

副徴税官という高い地位にあるナスルッラー・カーンに学んだナズィール・アフマドは、学問的のみならず、心理的にも大きな影響を受けた、と浩瀚なナズィール・アフマド研究書を著わしたイフティカール・アフマド・スィッディーキーは述べ、自分もナスルッラー・カーンのような人から尊敬される副徴税官になりたいという立身出世願望をナズィール・アフマドは抱いた、と推測しているが、<sup>(2)</sup> これは考え過ぎであろう。尤も、ナスルッラー・カーンに接して、イギリスや西欧文明についていくばくかの知識を得た事は十分有り得、この事が後にデリー・カレッジへ入学する一つの遠因となったとは言えるかも知れない。

ナスルッラー・カーンの許で、約3年間、教育を受けたナズィール・アフマドは、さらに勉強するため、ナスルッラー・カーンの勧めでデリーに行く事になる。ナズィール・アフマドは、兄と共に、父の師でもあったマウラヴィー・アブドゥル・カーリク(Maulavī ‘Abd al-Khālīq)の許に預けられ、そのモスクに住み込む事になった。そこに約5年間住む事になるが、この時期は、ナズィール・アフマドにとって、「生涯最悪の時期」となり、「もしあと4、5年でも余計に居たなら、私は聖俗両面で破滅していたろう」と彼は後に回想している。というのは、マウラヴィー達は、ナズィール・アフマドを教えなかったばかりでなく、学ぶ機会さえ与えようとしなかったからである。ナズィール・アフマドら学生は、モスクに住まわせてもらう事の代わりとして、マウラヴィー達の家を雑用をさせられたのであった。<sup>(3)</sup>

イフティカール・アフマド・スイッディーキーは、以上のようなナズィール・アフマドの回想は、ナズィール・アフマド一流の諧謔である、と述べている。<sup>(4)</sup>確かにナズィール・アフマドの諧謔癖には注意を要するが、デリーのマウラヴィー達の生活振りを真近から見て、その愚かさを憎むようになった事は、まちがいないと思われる。例えば、自分のいたモスクのマウラヴィー達の対立について、ナズィール・アフマドは次のように記している。

「私は当時も、それらの人々の相互対立を軽蔑の眼差で見えていた。そして、私は、マウラヴィー・ナスルッラー・カーンの警咳に接していた事があったので、それらの人々に対して、私の心には或る種の不信感と嫌悪感が生じたのだった<sup>(5)</sup>。」

ナズィール・アフマドのマウラヴィー嫌悪は、恐らく、この頃から始まったのであろう。

1846年1月、ナズィール・アフマドは、兄と共に、デリー・カレッジに入学、モスクでの辛い生活から解放される。

## (2)

ナズィール・アフマドが、約8年を過ごす事になるデリー・カレッジについて、ここで簡単に記しておく事にする。

デリー・カレッジは、18世紀に設立されたマドラサ(神学校)を基にして、インドに対するイギリスの教育政策の転換——無関心から教育への積極的出費へ——に伴い、イギリスの援助で、1825年に開設された。1828年には英語科が新設され、教育体制を整えていった。1835年、教育に関するマコーレーの覚書が発表され、英語が教育用語となるが、デリー・カレッジでは、天文学、数学、自然科学といった学科もウルドゥー語で教育された。こうした西欧科学の教育は、学生達に新鮮な驚きを与えた。1843年には、校長フェリックス・ブトロー(Felix Boutros)が、翻訳協会を設立、盛んに翻訳活動を行なった。この翻訳協会は、正式名称を The Society of the Promotion of Knowledge in India through the Medium of Vernacular Languages と謂い、Delhi Translation Society 或いは、Vernacular Translation Society と通称された。この協会は、英語、サンスクリット、アラビヤ語の有益な書物をウルドゥー語、ヒンディー語、ベンガル語に翻訳する事を目的としたが、実際にはウルドゥー語にだけ翻訳された。当時はまだペルシャ語の理解度が高かったためであろうか、ペルシャ語の書物からの翻訳料は半額とされた。この翻訳協会で翻訳された書物は、マーリク・ラーム作成の目録に拠ると131冊に及び、文学、数学、歴史、地理、法律、科学、医学、農学、宗教学、倫理学とその範囲は多岐に亘っている<sup>(6)</sup>。

このように、デリー・カレッジは、デリーに於ける西欧文明の窓口としての役割を果たしていたが、デリーのムスリム達は、カレッジを心良くは思っていなかった。例えば、1853年頃、故郷パーニーバトからデリーに出て来た詩人ハーリー(Hālī 1837-1914)は、次のように回想している。

「当時、デリー・カレッジは大層活気づいていたが、私が成長した社会では、知識はアラビヤ語とペルシャ語にのみ拠ると考えられていた。(……中略……)デリーに到着後、昼夜私が住まざるを

得なくなったマドラサでは、全ての教師、学生が、カレッジで教育を受けた人々を全くの無知の徒と考えていた<sup>(7)</sup>。」

このハーリーの言葉から、デリー・カレッジが、デリーにあって浮き上がった存在であった事が想像されるが、では、ナズィール・アフマドはどうしてデリー・カレッジに入学する事になったのであろうか。

1912年、デリーより刊行された、600ページ近いナズィール・アフマドの評伝『ナズィール伝』(Hayāt al-Nadhīr)では、ナズィール・アフマドのデリー・カレッジ入学の経緯は、凡そ次のように記されている。

金曜の休日、町を歩いているとデリー・カレッジの側を通りかかった。大会で賑わっており、ナズィール・アフマドは中に入ってみた。校長が外に出ようとしたので、事務員が人ごみを掻き分けた。人に押されてナズィール・アフマドは転び、泣き出した。校長はナズィール・アフマドを抱き起こし、話しかけた。まだ小さいのに難しい本を勉強している事が分り、口頭試問をさせてみた。校長は、ナズィール・アフマドの学力に感心して、入学を許可、奨学金も与える事にした、と<sup>(8)</sup>。

イフティカール・アフマド・スィッディーキーも指摘しているように、『ナズィール伝』のこの記述は作り話である可能性が高く、実際には、モスクでの生活に嫌気がさし、奨学金を得て勉学に励む事の出来るデリー・カレッジへの入学を決意したのであろう<sup>(9)</sup>。

ナズィール・アフマドの父親は、彼をマウラヴィー(イスラーム学者)にするつもりであったし、ナズィール・アフマド自身、アラビア語に強い関心を持っていたので、彼はアラビア語学科に入学したが、デリー・カレッジでは、英語学科、東洋語諸学科(アラビア語、ペルシャ語、サンスクリット)双方で、微分、三角法、幾何学、自然哲学、地理などが教えられており、ナズィール・アフマドは、ここで西欧的科学精神の洗礼を受ける事となる。これに関して、ナズィール・アフマドは次のように述べている。

「カレッジは、アラビア語については、私を大して手助けしてくれなかったが、また、不適性のために私は科学を好んでは学ばなかったが、しかし、知識の幅広さ、見解の自由、寛容(toleration)、政府(government)に対する心からの善意、動的で深い洞察、こういった教育の偉大な結果でもあり、実に人生の条件でもあるものを、私はカレッジに於いて学び、獲得したのであった<sup>(10)</sup>。」

少年時代の師ナスルッラー・カーンより、西欧について少しは知識を得ていたではあろうが、伝統的な教育を中心に受けて来たナズィール・アフマドにとって、西欧の科学的精神に触れる事、自由闊達なカレッジの雰囲気に触れる事は、非常な驚きであり、好むと好まざるとにかかわらず、深い影響を受けずにはいられなかった<sup>(11)</sup>。

当時を回想しつつ、ナズィール・アフマドは、カレッジからの影響について、次のようにも述べている。

「もし私がカレッジで学ばなかったとしたなら、私は一体どうなっていた事だろう。マウラヴィーとなっていたらうか、狭量で、頑迷な。馬鹿で<sup>(12)</sup>、自省する事なく、他人の欠点を探し回り、独善的

で、ムスリムの無知な友、時の要請に全く無知な<sup>(13)</sup>。」

ムスリム社会の指導層でありながら、伝統にしがみつ き、変化する現実に対応出来なくなっていたマウラヴィー層に対する嫌悪感が、カレッジ在学中に強まっていた事は、想像に難くない。カレッジ入学まで抱いていた世界観にも反省の眼が向けられるのは当然の成り行きであり、青年ナズィール・アフマドは、宗教対科学という、一大問題を抱え込む事になる。

「私はいささかの恐れもなく言うのであるが、カレッジでの学生時代は、宗教の点に於いては、私にとって激しい懐疑の時代であった。(…… 中略 ……)科学が私の宗教思想に攻撃をし始めると、科学に没入するのを性格が許さなかった。しかし、興味の無さが何の役に立つであろうか。科学の呼び声は、カレッジ中に鳴り響いていたのであった<sup>(14)</sup>。」

古い科学的知識、古い世界観に基づく宗教の信者が、最新の科学的知識、世界観に触れた時、それは単に新しい知識の獲得の問題に止どまらず、その信者の信仰そのものをも揺るがす強い衝撃となって現われるという事を、ナズィール・アフマドの例は如実に示していると言えよう。元々、英語教育、科学教育のインドへの導入には、西欧の最新の知識を提示してインド人に感銘を与え、西欧の優越、イギリスのインド支配の正当性を認めさせ、あわよくばキリスト教も普及させようという思惑があった。後に見るように、ナズィール・アフマドは、前者の、インド人にイギリスのインド支配を認めさせようという点では、うまくイギリスに絡み取られてしまったが、後者のキリスト教への改宗という点では、辛くも最後の一点で踏み止まった。

ナズィール・アフマドに大きな影響を与え、その信仰をぐらつかせたのは、デリー・カレッジ数学教授ラーム・チャンドラ(Rām Chandra 1821-1880)であった。卓越した数学者であると同時に、革新的な文学・社会思想の持ち主でもあったラーム・チャンドラに、ナズィール・アフマドは親しく師事しており、1852年、ラーム・チャンドラがキリスト教に改宗するまで、ラーム・チャンドラから、強い影響を受けていたと思われるが、結局、ナズィール・アフマドはイスラームを捨てるに至らなかった。当時を振り返って、ナズィール・アフマドは次のように述べている。

「しかし、私にはアラビア文学への関心が大いにあった。私はコーランの章句に心酔しており、この解毒剤が私をあの毒から救ったのであった。おかげでカレッジから私は信仰を無事に保って出たのであったが、その信仰たるや、動揺しており、懐疑的で、弱々しく、脆弱。それで私は神学の本を見始めたのだ<sup>(15)</sup>。」

デリー・カレッジの外にあって、カレッジを白い目で見るマウラヴィー達の旧習墨守の姿勢を否定しながらも、ラーム・チャンドラに代表されるカレッジ内西欧派にもついてゆけず、両者の中間にあって、葛藤に悩むナズィール・アフマドの姿に、モダニストの典型を見る事が出来るであろう。宗教と科学、或は伝統と西欧文明との葛藤の問題——これこそ、デリー・カレッジがナズィール・アフマドに与えた、言わば「恩恵」であり、文学者・思想家ナズィール・アフマドを生み出す一つの大きな原動力となったと言っても過言ではない。

デリー・カレッジ時代は、ナズィール・アフマドにとって思想的に重要な時期となったのみなら

ず、父の死、或いはマウラヴィー・アブドゥル・カーリクの長男マウラヴィー・アブドゥル・カーディル(Maulavi 'Abd al-Qādir)の娘との結婚と私生活でも重要な時期となった。ナズィール・アフマドは、ムスリム社会の伝統に逆らい、親の意を介する事なく、自分の意志で結婚した。これは、ナズィール・アフマドが、伝統の外に踏み出しており、自由な精神を獲得していた事を示す一つの証左と考えられよう。

### (3)

1853年12月、ナズィール・アフマドは、デリー・カレッジを卒業し、翌1854年、パンジャープのグジャラートへ新設学校の教師として赴いた。ところが、そこでの仕事は満足出来るものではなかったので、カーンプルの副視学官となった。しかし、些細な事で上司と喧嘩し、辞職してデリーに戻った。そして1857年の「インド大反乱」を迎える事となる。

「インド大反乱」の際、数多くのイギリス人が殺害されたが、ナズィール・アフマドは、舅のマウラヴィー・アブドゥル・カーディルらと共に、一人の負傷したイギリス婦人を助けた。イギリス人を助ける事は、生命の危険を伴う事であったが、「カレッジの教育、カレッジでの交際の影響<sup>(16)</sup>」で、ナズィール・アフマドは、イギリス婦人を助けたのであった。

恐らく、副徴税官ナスルッラー・カーンに師事した時、既にナズィール・アフマドは、イギリスの政治権力の強大さ、或いは西欧文明の卓越性を、幼ないながらも、感じ取っていた事であろう。デリー・カレッジへの入学は、ナズィール・アフマドに、西欧文明を身を以て知る機会を与え、イギリスの政治的・文明的優越性を明白に悟らせた事であろう。「大反乱」当時を回想して、ナズィール・アフマドは次のように述べている。

「これこそが、全ての住民を縛り上げた科学的な政府である。インドでは、このような強力な政府は、イギリス人の前には、誰にも得られなかった。また、得られもしないであろう。1857年の反乱の際、私は心の奥底でこう言ったものだった —— イギリス人が賢明であるなら、身を寄けてしばらくの間海に居よ、と。反乱者達が忘恩の味を十分味わえるように。当時は、イギリス人の科学的支配は現在程強固ではなかったが、それでも当時あったような、また、当時あっただけの事だけで、他の如何なる民族にも、我々がイギリスの統治下で得ているような安寧を与えるだけの能力がない、と考えるには十分であった。ともあれ、この統治の弱体化を喜ぶ独善的で短慮な反乱者達が<sup>(17)</sup>、数日の内に困り果て、懇願してイギリス人を迎え入れる事になれば良からう……。 (…… 中略 ……)) ともかく、私の当時の決定はこうであった —— イギリス人にこそインド統治の能力があり、統治は彼等の権利であり、彼等によってのみ確立されなければならない、と。 (…… 中略 ……)) 私は頭の中で一つの規則を決めたが、それは恐らく長期間に亘って考え直す労をとらなくても良いものであろう。その規則というのは、現代に於いては、統治は何ら不変の生得権ではなく、科学的優越性に服し、それに属する、という事である<sup>(18)</sup>。」

以上のナズィール・アフマドの言葉は、ナズィール・アフマドが、科学的優越性を持つ者が支配



するのを当然とする観点、言うなれば帝国主義的観点に立っていた事を明瞭に示している。これは、言うまでもなく、デリー・カレッジの教育の影響であり、一見中立的と見える科学教育が、実際には、きわめて有効な帝国主義の武器となる事の一つの証明ともなっている<sup>(19)</sup>。

ナズィール・アフマドの弟子ミルザー・ファルハトゥッラー・ベグ (Mirzā Farḥat Allāh Bēg) の著わしたナズィール・アフマドの言行録『ナズィール・アフマド博士の話 —— 自分の、そして博士の言葉に拠る』(Doctor Nadhir Aḥmad ki kahānī kucch mēri aur kucch un ki zabānī)の中にも、「大反乱」に対するナズィール・アフマドの見方をよく示す、次のようなナズィール・アフマドの言葉が記されているので、紹介しておきたい。

「いいかね、バハードゥル・シャーは無力だったのだ。誰か他の者にもしこの災難が降り懸かったとしても、その者もやはりあのように、あのごろつき兵士どもの手によって、操り人形のように踊った事だろう。この連中は、そもそも、皇帝を助けようとはあまり思わず、彼等の目的は、町を略奪する事なのだった。その目的は達成され、連中はデリーを空っぽにしたのだった。」

こう述べた後、ナズィール・アフマドは、「反乱軍」についての自分の目撃談を凡そ次のように語っている —— 或る日、道を歩いていると軍隊がやって来た。先頭では楽隊が太鼓を滅茶苦茶に叩き、後には50～60人の騎兵が続いていた。馬にはデリーの町で略奪した品物を入れた袋がたくさん付けられてあり、馬の体が見えないくらいであった。中央には、男物、女物の区別なく宝石を身に付けた指揮官がおり、その馬も宝石で飾り立てられていた。一隊は香水屋の前で止まった。香水屋は軍隊が来るのを見て店を閉めていたが、指揮官は店を開けさせ、最上の香水を持って来させた。香水屋はガラス瓶に入った香水を二つ差し出した。指揮官はコルクを抜こうともせず、瓶の頭同士をぶつけて開け、臭いを嗅ぎ、少し気に入ったのか、一方の香水を馬のたてがみに、他方を尾にかけた。「こうして、憐れな香水屋に数百ルピーの損害を与えて、このインドに自由をもたらそうという者達は去って行った。」

「反乱の無分別の嵐で蒙った損害は仕方がないが、カレッジの望遠鏡を破壊して、この無秩序の軍隊が国にもたらした損害の償いは不可能である」とナズィール・アフマドは続ける —— デリー・カレッジの校長の部屋の上に大きな望遠鏡が据え付けてあった。これは、カレッジの支援者の或るイギリス人がカレッジに寄贈したもので、そのレンズは、そのイギリス人の家族の者によって、何年にも互って研磨されており、カレッジの自慢の種であった。この望遠鏡は大砲のように見えたので、イギリス軍の大砲とまちがわれ、襲撃を受けた。望遠鏡のレンズは台尻で叩き割られ、望遠鏡は投げ捨てられてしまった……<sup>(20)</sup>。

以上のナズィール・アフマドの話が象徴的に示しているように、ナズィール・アフマドにとって、1857年の「大反乱」は、デリーの秩序を破壊するもの、文化(香水)や文明(望遠鏡)を理解する事の出来ない者達が起こした愚挙に他ならないのであった。

## (4)

「大反乱」の後、ナズィール・アフマドはアラハーバードの副視学官となる。この時期、彼はデリー・カレッジ時代には学べなかったもの、即ち英語の学習に取り掛かる。

「私がどういう父親の息子かと言うと、」——とナズィール・アフマドは述懐する——「デリー・カレッジの校長が、私が英語を勉強する事をいくら望んでも、一人の貧しくはあるが、その時代のとても信仰の深い人であった父は、きっぱりとこう言ったのだった、息子が死ぬのはかまわない、息子が乞食をするのはかまわない、しかし、英語を学ぶのは我慢出来ない、と<sup>(21)</sup>。」

ナズィール・アフマドの父親の言葉にあるように、保守的なムスリムにとって、英語を学ぶ事は許されざる行為であり、デリー・カレッジ時代のナズィール・アフマドは、多分、英語の重要性を認識しつつも、父親の意に添うために、また、科学の影響を受け、動揺する己れの信仰を持ちこたえさせるために、英語学習に手を染める事が出来なかったのであろう。

アラハーバードで、ナズィール・アフマドは或る司法官の家に住み込んでいた。この司法官が敬虔なムスリムであると同時に英語にも堪能であるのを見て、ナズィール・アフマドは信仰と英語とは背反しないと考え、ようやく英語の学習を始めた。『千夜一夜物語』の英訳本で少しづつ勉強、かなり読みこなせるようになった。

英語を身に付けた事によって、ナズィール・アフマドは大きな好運に恵まれる事になる。当時、徴税委員会の委員であったウィリアム・ミューア(William Muir)に所得税法のウルドゥー訳を任せられ、次いで1860年頃開始されたインド刑法のウルドゥー訳の訳者の一人にも選ばれ、これが機縁となってナズィール・アフマドは栄達の道を歩む事になる。アラビア語はナズィール・アフマドの信仰を保証する言語であり、英語は現世的な利益をもたらす言語となったと言える。因に、ナズィール・アフマドのウルドゥー語の著作や講演には、アラビア語や英語の語句が必要以上に使われているが、このような文体に、アラビア語と英語の影響の深さ、そして両言語に代表される二つの新旧世界の同居を許すナズィール・アフマドの思想の在り方を探る事が出来るであろう。

ナズィール・アフマドの述懐に拠れば、英語からウルドゥー語への翻訳作業は、彼のウルドゥー散文の文体を改善するのに役立ち、徴税委員会の回状を訳したりして翻訳の練習を行なったおかげで、ナズィール・アフマドは、仰々しい言葉、押韻、誇張、隠喩、直喩なしで平易、簡明、香気ある文章で言いたい事を伝える文体を知り、それは後になって人々に大変好まれるようになったという。<sup>(22)</sup>

デリー・カレッジ時代、ナズィール・アフマドは、翻訳協会から出版された翻訳書やラーム・チャンドラのエッセイ等で近代的ウルドゥー散文を見知っていたはずであるが、自ら翻訳を行なう事によって初めて、時代の要請する文体が何であるかを切実に感じたのであろう。

インド刑法のウルドゥー訳は数人で行なわれ、ナズィール・アフマドは文章の修正を担当、ラックナウのムンシー・ナワルクシヨール(Munshi Nawalkishor)から出版する作業も任せられた。この一連の仕事によって副徴税官に推挙されるが、空席がなかったので、1862年、カーンプルのタ

ハスィールダール(郡長)に任命された。

この頃、ナズィール・アフマドは、刑事訴訟手続き (zābiṭah-e faujdārī)のウルドゥー訳の修正も行ない、また、『反乱の厄災』(Masā'ib-e ghadar) の名で、イギリス人士官の書いた書物を英語からウルドゥー語に訳したり、イソップ物語の翻訳を行なったりもしている。後者は、後に『寓話集』(Muntakhab al-Hikāyāt) という本に纏められた。

1863年、ナズィール・アフマドは晴れて副徴税官となり、ゴーラクプルへ赴任、次いでジャールーンに転勤、ここで小説を書き始める。ナズィール・アフマドの回想に拠れば、その動機となったのは、彼の子供の教育であった。ナズィール・アフマドには、娘が二人と息子が一人あり、そろそろ教育を始めなければならない時期となったので、何か良い教科書はないか探したがなかったので自分で書いた、とナズィール・アフマドは言う――

「私は自分の子供達のために、子供達が喜んで読むような本が欲しいと思っていた。探し回ったが、何処にも見つからなかった。仕方なく私は一人一人の発育に応じて自分で本を作り始めた。長女には『花嫁の鏡』(Mir'at al-'urūs)、次女には『寓話集』、息子のバシールには『訓戒集』(Chand pand)<sup>(23)</sup>。」

これらの本は、数ページづつ執筆され、子供達に渡された。

1867年、ナズィール・アフマドはゴーラクプルへ転勤、ここで『花嫁の鏡』は完成された。『寓話集』『訓戒集』については、何時完成したか、正確な年代は不明である。

『花嫁の鏡』は、女性が生きていく上で必要な事柄を、無能な姉アクバリ(Akbarī)と有能な妹アスガリー(Asgharī)の結婚生活の様子を通して、物語仕立ての中で教えようとするもので、ナズィール・アフマドの最初の小説であると同時に、ウルドゥー最初の近代小説であると評価されている。『寓話集』はイソップ物語やその他の物語からの寓話、有名な人物の物語など合計77の話を収めている。『訓戒集』は道徳、礼儀作法、地理、歴史、イスラームの預言者達等について簡明に書かれたものである。当時、子供向けの物語や教科書が、イギリス人統治者による教育政策の積極的な推進もあって、かなり書かれていたが、それらに不満を持つ程、ナズィール・アフマドの児童教育に対する意識は高かったであろう。『花嫁の鏡』序文の中で、ナズィール・アフマドは次のように書いている。

「(…… 前略 ……)即ち、純粋に宗教的な思想というのは子供達の段階には適さない。子供達の前に置かれているのは、それによって子供達の心が打ちひしがれてしまい、子供達の気分が不愉快になり、そして子供達の頭が鈍くなってしまうようなものなのだ。それで私は次のような本を探さなくてはならなかった。道徳、教訓に満ちており、そして婦人の生活に現われるような事柄で、その迷信と無知、謬見のために婦人達が常に悲哀と不幸に捕われているような事柄について、婦人達の物の考え方を改め、そして婦人達の習慣を正すような、そして婦人達の心が倦んだり、狼狽したりしないように、何か面白い形になっているような本。」

当時の児童書や教科書がどのようなものであったか、よく分らないが、ナズィール・アフマドの

言葉に拠れば、子供を退屈させないような配慮がなされている本がないので、ナズィール・アフマドは自分で教育的要素と物語要素とをうまく結合させたものを作ろうとしたのであった。子供を見る親の目は、遅れた自民族を見る改革者の目へと転換され、この二つの要素の結合は、一般人向けに書かれた小説の中でも追求され、時にはうまく結合し、時には排反して、ナズィール・アフマドの文学の大きな特色を形作る事となった。

『花嫁の鏡』は、1869年、北西州政府がウルドゥー語とヒンディー語の発展のために行なったコンクールに出品され、翌1870年、北西州副知事ウィリアム・ミューアより1000ルピーの報奨金が授けられた。この小説は大好評を博し、インドの六つの言語に翻訳されたのみならず、英訳、仏訳もされたとする<sup>(24)</sup>。

『花嫁の鏡』に次いで、1871年から1872年頃、その続篇『熊座』(Banāt al-na'sh)が執筆された。この小説は、イギリスの小説家トーマス・ディ(Thomas Day)の『サンドフォードとマートン』(History of Sandford and Merton)に影響されて書かれたものである<sup>(25)</sup>。

1872年、ナズィール・アフマドは、ゴーラクプルからアーザムガルへ転勤、ここで第三長篇小説『ナスーフの後悔』(Taubah al-Naṣūh)と数篇の小冊子を執筆した。

『ナスーフの後悔』は、大病の後、自分と自分の家族を矯正しようとするナスーフとそれに反抗しようとする子供とを描いた作品で、家庭教育の問題が主題となっている。この小説は、1873年、州政府のコンクールに提出され、審査の後、1000ルピーの報奨金が与えられた。翌1874年、アーグラより出版された。

また、息子バシールのために、次のような小冊子を執筆しており、ナズィール・アフマドの文学活動が、教育活動と表裏一体であった事が分る。

1. Mā yughnika fī al-ṣarf アラビア語文法書。
2. Nisāb-e Khusrau アラビア語、ペルシャ語の単語の意味を書き記したもの。
3. Ṣarf-e ṣaghīr ペルシャ語文法書。
4. Rasm al-khaṭ t 正書法に関するもの。
5. Mabādi al-hikmat 論理学に関するもの。公立学校の論理学教科書として書かれ、コンクールに出品、州政府より 500ルピーの報奨金を与えられた。

因に、報奨金について、ナズィール・アフマドは次のように述べている。

「私が作成した本は、単に報奨のためではなく、そもそもは、これらの本による自分の子供達の教育が目的だったのであり、政府から与えられた報奨はおまけだった<sup>(26)</sup>。」

報奨金そのものは目的ではなかったにしても、州政府のコンクールに積極的に参加しているところから見て、ナズィール・アフマドの創作・執筆活動の裏には、名誉欲がかなり働いていたと考えられる。州政府の、婦人教育の推進その他の改革事業を行なう啓蒙的イギリス人統治者がどういう傾向の作品を好むか、ナズィール・アフマドはよく知っていた筈であり、この意味で、ナズィール・アフマドの作品は、イギリス人統治者とナズィール・アフマドとの共作であったとも言えるであろう。

う。

以上の小冊子の他、ナズィール・アフマドは、天文学の本を英語からウルドゥー語に訳したり、証言法に関する小冊子の翻訳(1870年頃)も行なっている。

(5)

1877年、ナズィール・アフマドは一年間の休暇を取り、ハイダラーバード藩王国に向かった。当時ハイダラーバード藩王国の摂政サーラール・ジャング(Sālār Jang)一世は、藩王国内の政治改革を行っており、有能な人材を広く求めている。インド・ムスリムの精神変革、社会改革を目指すアリーガル運動の指導者サイイド・アフマド・カーン (Sayyid Ahmad Khān 1817-1898)の働きかけで、ナズィール・アフマドがハイダラーバード藩王国に呼ばれる事となったのである。

ナズィール・アフマドは、藩王国の統治、徴税に当たり、1883年には徴税委員会委員となった。こうしてナズィール・アフマドは、藩王国内で地位を高めていったが、1883年2月8日、サーラール・ジャングが死去、藩王国内の権力闘争が激化し、ナズィール・アフマドはこれに巻き込まれるのを良しとせず、2月下旬、辞職してデリーに戻った。ハイダラーバード時代には、政務に追われ、サーラール・ジャングの命で、幼ない藩王のために、統治に関する小冊子を数冊執筆したのみであった。

ハイダラーバード藩王国の職に就いた後、ナズィール・アフマドは、インド植民地政府内の職を辞していたので、デリーに帰ってからは年金で生活する身となった。こうして読書や文筆活動に専念するようになり、次の四篇の小説を執筆した。

1. 『ムブタラーの物語』(Fasānah-e Mubtalā 1885年、執筆。1887年、ラックナウのナワルキショール・プレスより出版)
2. 『イブヌルワクト』(Ibn al-Waqt 1888年)
3. 『寡婦』(Ayyāmā 1891年)
4. 『サーディカの夢』(Rōyā-e Ṣādiqah 1894年)

『ムブタラーの物語』は、妻が有りながらも、踊り子と密かに結婚してしまう主人公ムブタラーの悲劇を描き、一夫多妻制を批判する作品。

『イブヌルワクト』は、インド大反乱の時、イギリス人士官を助けた事からこの士官に取り立てられ、イギリス風の生活をするようになる主人公イブヌルワクトの運命の盛衰を描き、過度の欧化主義を批判する作品。

『寡婦』は、寡婦の再婚を認めようとしない社会を批判するもの。

『サーディカの夢』は、敬虔な妻と宗教に懐疑的な夫との物語を通してイスラームの教義を提示しようとした作品。

初期の三作品、『花嫁の鏡』、『熊座』、『ナスーフの後悔』が、女子教育、家庭教育という教育問題を中心とするものであったのに対し、ハイダラーバードからデリーに戻ってから書かれた四作品は、社会問題、宗教・思想問題とより広い題材を扱うようになっている。いずれにしてもナズィー

ル・アフマドは、様々な問題を、大上段に振りかぶって論じるのではなく、家庭という身近な所から、或は、主人公の生活に即して具体的に考えようとした。この点にナズィール・アフマドの思想的・文学的営為の一つの大きな特徴を見る事が出来るであろう。小説という表現形式は、そのような営為に最適のものなのであった。

ナズィール・アフマドは全部で七篇の小説を書いたが、その内四篇までが女性に関わる問題を直接の主題としており、ナズィール・アフマドの婦人問題への関心の深さを窺う事が出来る。アリーガル運動の指導者アフマド・カーンは、婦人問題にはあまり関心を持っていなかったようであるが、アフマド・カーンの協力者で詩人のハーリーは、「寡婦の祈り」(Munājāt-e bēwah 1886年)や「堅忍への称賛」(Chup ki dād 1905 年)のようなウルドゥー詩を書き、再婚を認められず、邪魔者扱いされる寡婦や教育の恩恵に浴する事も出来ず、黙々と働くしかない女性の姿を描き、婦人の地位向上を訴えた。ハーリーには、ナズィール・アフマドの『花嫁の鏡』に触発されて執筆されたと言われる『婦人の集い』(Majālis al-nisā 1874年)という婦人教育の必要性を訴える作品もあり、ハーリーとナズィール・アフマドの二人は、アリーガル運動時代の代表的な婦人解放論者であったと言える。ムスリム王朝の崩壊、イギリス支配の開始により「弱者」意識を持たざるを得なくなった事、イギリス啓蒙思想の影響、ブラーフマ・サマージやアーリヤ・サマージのようなヒンドゥーの宗教・社会改革団体が婦人の地位向上を主張していた事等によって、インド・ムスリムも社会的弱者である女性に目を向けるようになったのであろう。

ところで、ハイダラーバードからデリーに戻って後、ナズィール・アフマドは、小説の執筆以外に、『コーラン』のウルドゥー訳に取り組んだり、宗教的な著作を発表したりするようになる。

『コーラン』のウルドゥー訳は、ナズィール・アフマド以前にも行なわれていた。最初のウルドゥー訳は、有名なイスラーム思想家シャー・ワリーウッラー (Shāh Waliullāh 1703–1765)の息子シャー・ラフイーウッディーン (Shāh Rafī‘ al-Dīn) の手により、1786年に行なわれたが、これは逐語訳で読みにくいものであった。1790年、シャー・ラフイーウッディーンの子シャー・アブドゥル・カーディル(Shāh ‘Abd al-Qādir)が、もう少し解り易い翻訳を行ない、これがよく普及した。その後、19世紀に入って、カルカッタのフォート・ウィリアム・カレッジでも『コーラン』のウルドゥー訳が試みられたが、出版されなかったようである。1892年、マウラヴィー・ムハンマド・イフサーヌッラー・アル・アッバースィー (Maulavī Muḥammad Iḥsānullāh al-‘Abbāsī)により、『コーラン』の一部が、逐語訳ではなく、ウルドゥー語の慣用表現に則った形で翻訳された。しかし、これは原典からの直接訳ではなく、先行するウルドゥー訳からの重訳であった。

ナズィール・アフマドは、元々、『コーラン』の翻訳には反対で、『コーラン』の名文は翻訳不可能であると考えていたが<sup>(27)</sup>、1892年、息子のバシールが、上記のアル・アッバースィー訳のような翻訳が行なわれる事の危険性をナズィール・アフマドに説いた事、また、ナズィール・アフマドがハディースの本を翻訳中、書中に現われる『コーラン』の章句の翻訳も行なわなければならない、その翻訳を行なっている内に『コーラン』翻訳に対する考えが変わった事などにより、ナズィール・

アフマドは、『コーラン』のウルドゥー訳に着手した。

『コーラン』翻訳に関して、ナズィール・アフマドは、こう述べている。

「(…… 前略 ……)即ち、この時代のムスリムの宗教の基礎は、祖先の模倣にあり、或は慣習、或は社会様式、或はその他の物——諸君が適当に考えてくれれば良いが——にあり、『コーラン』にはない。何故なら、この憐れな者達は、『コーラン』の意味を知らないからである。」「そしてこれは私の確固たる信念であるが、もし我々が『コーラン』をその原文で理解していたならば、今そうであるよりもずっと良いムスリムであったであろう。」「アラビア語という動かなくなった車を動かそうというのは、空想的で、不可能で、狂気の沙汰。その事に失望すると、私は翻訳を認めるようになった。ムスリムにアラビア語を学ぶ時間がなく、能力もないなら、彼等を翻訳に親しませるべきである、何らかの形で神の命令が彼等の耳に入るように<sup>(28)</sup>。」

このように、『コーラン』翻訳は、イスラーム信仰の基礎が『コーラン』にあるにもかかわらず、『コーラン』が理解されていない事に危機感を覚えて行なわれたのであった。

1896年、ナズィール・アフマド訳の『コーラン』が刊行された。この『コーラン』には、次のような特徴があった。

- (1) 逐語訳ではなく、ウルドゥー語の慣用表現に基づくものである事。
- (2) 文意を明確にするため、語句や文章を括弧に入れて補い、それでも不十分だと思われる時は、シャー・アブドゥル・カーディル版を真似て、欄外に註釈を付した事。

ナズィール・アフマド訳『コーラン』は、ナズィール・アフマドの存命中、11版まで出版され、ナズィール・アフマドは、内容、装丁の充実に努力し続けた。『コーラン』の翻訳の他、『コーラン』に見られる祈願文を集めた『コーランの祈願文』(Ad'iyah al-Qur'ān)や『コーラン』の重要な章句を集めた小冊子(Haft sūrah, Dah sūrah 等)も編纂している。

こういったイスラームの真の理解を広めるための活動の一環として、ナズィール・アフマドは、いくつかの宗教的著作を執筆している。先ず最初に上梓されたのは、大判サイズで1000ページにも及ぶ大著『権利と義務』(Al-ḥuqūq wa al-farā'iz 全3巻 1906年)で、これには、神、人間、社会生活に関する事柄が包括的に論じられており、ナズィール・アフマドのイスラーム観を詳細に知る事が出来る。

1907年頃執筆された『イジュティハード』(Ijtihād)も、一神論、預言者、奇跡と予言、『コーラン』降下の真因といった神学的問題から、マウラヴィー達への忠告、ムスリムの改革といった社会的問題にまで説き及ぶもので問答形式で書かれている。序文の中で、自分は何故ムスリムなのかという問題を自問自答し続けて来、それを問答の形で本にした、とナズィール・アフマドは述べており、この著作を読めば、ナズィール・アフマドの思考形式を綿密に知る事が出来る。ナズィール・アフマドの小説を真に理解するためにも、また、アフマド・カーンのモダニズムとは異なった、ナズィール・アフマドのモダニズムの特質を知るためにも、この『イジュティハード』と先に触れた『権利と義務』は十分に検討されなければならないであろう。

1908年、ナズィール・アフマドは、『ウンマの母達』(Ummahāt al-ummah ウンマとはイスラーム共同体の事)を出版したが、これは、ナズィール・アフマドにとって、生涯最大の失敗作となってしまった。この『ウンマの母達』は論争的な性格の本で、イスラームの一夫多妻制を批判する、キリスト教徒アフマド・シャー・ショウク(Ahmad Shāh Shauq)の著書『信者の母達』(Ummahāt-e mauminīn)に反論するため書かれた。ショウクの著書が出版されてから10年も経ってから発表されたが、これは、ショウクの著書の中に、ナズィール・アフマドの『ムブタラーの物語』が援用されているのを後になって知ったためであるらしい<sup>(29)</sup>。

ナズィール・アフマドの文体は、砕けた慣用表現の多用、諧謔性を特徴とするが、『ウンマの母達』の中で、最大の敬意を払わなければならないマホメットやその家族、カリフ達に対しても、小説の登場人物に対するのと同じような調子で、いつもの文体を用いたため、出版するや否や不敬の謗りを受けた。それでナズィール・アフマドは、『ウンマの母達』を全冊ウラマーに差し出さざるを得なくなった。これらは焚書処分にされた。この事がこたえたのか、『ウンマの母達』の後、ナズィール・アフマドは、『コーラン』の包括的、体系的な註解を目指す『コーランの意味』(Maṭālib al-Qur‘ān)の執筆に取りかかったが、第一部の途中で書くのを止めてしまった。

以上のような宗教的著作を発表する一方、ナズィール・アフマドは、1903年、デリーで行なわれたエドワード7世の即位記念式典に関する本のウルドゥー訳を、政府の命により、行なった。これは、Tārīkh-e darbār-e tājpōshīという名で出版された。また、ナズィール・アフマドの書簡集や詩集も編まれた。

書簡集『忠言』(Mau‘īzah-e ḥasanah)は、ナズィール・アフマドが、アーザムガル、ハイダラーバード、デリーから息子バシールなどに宛てた書簡を集めたもので、ナズィール・アフマドの心酔者でバシールの友人でもあったムハンマド・アブドゥル・ガフル・シャハバーズ(Muhammad ‘Abd al-Ghafūr Shahbāz)という人物の手により、1877年に出版された。『忠言』は、平易で、形式張らない文体で書かれており、イフティカール・アフマド・スィッディーキーは、『忠言』を、ガリブ(Ghalib 1797–1869)の書簡集に続く、近代的散文で書かれたウルドゥー書簡集の好例であると高く評価している<sup>(30)</sup>。

ナズィール・アフマドの詩を集めた詩集『比類なき詩』(Naẓm-e bē-naẓīr)は、マウラヴィー・サイイド・イフティカール・アーラム(Maulavī Sayyid Iftikhār ‘Ālam)により、1909年に出版された。この詩集には、ウルドゥー語のものが45篇、アラビア語のものが7篇収められている。内容は大体がムスリムの抱えている問題に関するもので、様々な大会で発表された詩が中心になっている。

『比類なき詩』という題名は、元々、アフマド・カーンが付けたもので、ナズィール・アフマドがメーラトでの教育会議の席上で発表した詩がアフマド・カーンの気に入る、アフマド・カーンはそれを『比類なき詩』という題名で出版したのであった。イフティカール・アーラムは、それを詩集全体の題名としたのである。

ナズィール・アフマドの詩は、文学的には高く評価されてはいないが、ナズィール・アフマドの



思想を検討する上で重要であり、また、ハーリーを初めとするアリーガル運動系の文人達によってウルドゥー近代詩が形成されていく過程を追跡する上でも、ナズィール・アフマドの詩は重要な資料となるものであり、文学的価値が低いからと言って軽視すべきものではない。

ハイダラーバードからデリーに帰ってから、ナズィール・アフマドは、著作活動以外に講演活動も行なうようになり、講演者としての名声も得るようになった。

ナズィール・アフマドが初めて講演を行なったのは、1888年10月5日の事で、デリーの町舎で開催された、国民会議派に反対する集会に出席し、国民会議派に参加しないよう訴える講演を行なった。ナズィール・アフマドの講演は好評を博し、これ以後、1905年まで毎年、ムスリム教育会議 (Muslim Educational Conference) やイスラーム擁護協会 (Anjuman-e ḥimāyat-e Islām), デリー医学校 (Madrasah-e ṭibbiyah Delhi) の年次大会で、教育問題、社会問題などを中心に、アリーガル運動を支援する講演活動を行なった。1888年から1905年までの間に40数回の講演を行ない、これらの講演は、1901年と1902年のものを除いて、『講演集』(Lekcharōṇ ka majmū'ah 全2巻 1918年)に収録された。

アリーガル運動の指導者アフマド・カーンとナズィール・アフマドは旧知の間柄であった。1898年4月27日に行なわれたアフマド・カーン追悼集会で、約45年前からアフマド・カーンを知っている、とナズィール・アフマドは述べており<sup>(31)</sup>、デリー・カレッジの学生ではなかったが、デリー・カレッジの教官と交際があり、デリー・カレッジの考古学協会の会員でもあったアフマド・カーンとカレッジを通じて知り合ったのであろう。尚、ナズィール・アフマドは、アリーガル・カレッジ設立(1875年)に際して、寄付金を送るなどしてアフマド・カーンに協力し、1887年にはアリーガル・カレッジの理事となっている。

親英的で、国民会議派に反対する政治姿勢、近代的教育の普及や形骸化した宗教思想の変革を訴えた点で、ナズィール・アフマド、アフマド・カーン両者は非常によく似ている。尤も、ナズィール・アフマドはアフマド・カーンの支持者であると同時に、いくつかの重要な点でアフマド・カーンの批判者でもあった。両者の比較検討は、ナズィール・アフマドの文学・思想の特質を浮かび上がらせるためだけでなく、アリーガル運動時代の文学・思想状況を考察するためにも必要不可欠であり、今後の研究課題とする事にしたい。

アフマド・カーンの強力な指導力によって指導されたアリーガル運動は、ハーリーの詩のみならず、ナズィール・アフマドの講演によっても大いに普及された。しかし、アフマド・カーンの後継者ムフスィヌル・ムルク (Muḥsin al-Mulk 1837-1907) やワカルル・ムルク (Waqār al-Mulk 1841-1917) とナズィール・アフマドは折り合いが悪く、晩年、ナズィール・アフマドはアリーガル運動から手を引いてしまった。

1912年4月27日、中風の発作に襲われ、5月3日、死去。

尚、ナズィール・アフマドは、1897年、インド政庁より「学者の太陽」(Shams al-'Ulamā) の称号を、1902年には、イギリスに帰国後、エディンバラ大学の総長を務めていたウィリアム・ミュー

アの働きかけで、エディンバラ大学より L.L.D. の名誉称号を与えられている。

# 註

- (1) マウラヴィーとは、イスラーム神学者・法学者の敬称。
- (2) Iftikhar Aḥmad Siddiqī, *Mawlavi Nadhīr Aḥmad Dehlvi: aḥwāl-o-āthār*, Lahore, 1971. p.39.
- (3) Bashīr al-Dīn Aḥmad (ed.), *Lekcharōn ka majmū'ah*, vol 2, Agra, 1918 (以下L.M.IIと略す) p.417.
- (4) Iftikhār Aḥmad Siddiqī, *op.cit.*, pp.43–46.
- (5) L.M.II, p.416. ナズィール・アフマドに拠れば、マウラヴィー達は、初期イスラームに回帰しようとするワッハーブ派(Wahhābī)と初期イスラームの正しい教えを「革新」(ビドア bid'ah)した、と批判されたビドア派(bid'atī)に分かれて対立していた。
- (6) Mālik Rām, *Qadīm Dillī College*, New Delhi, 1975.  
尚、この目録に収められている本の内、発行年の記されているもので最も新しいのは、1853年のものである。翻訳協会の活動が何時まで続いたかは不明である。デリー・カレッジそのものは、1877年に閉鎖された。
- (7) Shaikh Muḥammad Ismā'īl Pānīpattī (ed.), *Kulliyāt-e nathr-e Hālī*, vol. 1, Lahore, 1967, p.335.
- (8) Iftikhār 'Ālam, *Hayāt al-Nadhīr*, Delhi, n.d., pp.19 –20.
- (9) Iftikhār Aḥmad Siddiqī, *op.cit.*, p.48.
- (10) L.M.II. p.419.
- (11) 例えば、1871年頃、女子教育を目的として書かれたナズィール・アフマドの長篇小説『熊座』(Banāt al-Na'sh)では、科学的知識の紹介が意識的に行なわれているが、これは、デリー・カレッジ時代に、科学の重要性を深く認識した事に拠ると考えられる。
- (12) 原文ではakhī khurā. 正確な意味は不明。'aql khorāという事か。
- (13) L.M.II. p.419.
- (14) L.M.II. p.423.
- (15) Bashīr al-Dīn Aḥmad (ed.), *Lekcharōn ka majmū'ah*, vol. 1(以下L.M.I と略す), Agra, 1918, p.200.
- (16) L.M.II. p.426.
- (17) 「反乱者達」(bāghiyān)とすべきところを、原文では「庭師」(bāghbān)と誤記されている。
- (18) L.M.I. pp.55 –56.
- (19) 西欧文明の優越性を認めた事だけが、ナズィール・アフマドの親英的姿勢の原因であったとは言えないであろうが、その大きな原因となった事はまちがいないであろう。
- (20) Mirzā Farḥat Allāh Bēg, *Doctor Nadhīr Aḥmad ki kahānī kuch aur kuch un ki zabānī*, Delhi, 1981, pp.60 –64.
- (21) L.M.I. p.381.
- (22) L.M.II. pp.431–432.
- (23) L.M.II. p.436.
- (24) Ashfāq Aḥmad A'zamī, *Nadhīr Aḥmad : shakhsīyat aur kārnāmē*, Delhi, 1974, p.140.  
尚、インドの六言語というのは、ベンガル語、グジャラート語、ヒンディー語、マラーティー語、パンジャブ語、カシミール語の六つである。
- (25) L.M.II. p.438.
- (26) L.M.II. p.440.
- (27) L.M.I. p.78.
- (28) L.M.II. pp.24.–25.
- (29) Iftikhār Aḥmad Siddiqī, *op. cit.*, pp.298–299.
- (30) *Ibid.*, p.243.
- (31) L.M.II. p.244.